

黄昏からの眺め その三

みずき 啓

一九七十年代初頭、オイルショックがじわじわとにじり寄り、収入をやみくもに貯金に廻すような、極端な新婚生活を私は強いられていた。結婚直後に妊娠。その経過観察の通院も、医者に叱られながら屢々おろぬき、一回の診察につき千五百円の費用を節約した。

「夜出産すると高いから、昼間産みなさい」
義母と夫の無茶振りコーラス。夫は

「赤ん坊なんて自然と生まれて来るもんだ。トイレで産む人だっているじゃないか」と、言う。

その頃、列車のトイレや森の中で、人知れず出産した記事が出ていた。確かに、今も昔も有り得ない所で産まざるをえない女達は、世界的にいる。

義姉の、義母の家に里帰り出産した初めての孫は、出産時の事故で死産してしまった。

私は、根性で？三人、昼間に産んだ。

子供達も私も貰い物の服を着て外出もままならず、私は孤独だった。幼稚園へ親子達が賑やかに家の前を

行き帰りする。その賑やかな声は、私の手の届かない別の世界のことと思えた。

しかし、末の三人目が幼稚園に通いだし、私にもそろそろ社会再デビューの時が来た。

まず、手近なところから、近くの公民館の句会に参加した。

そして、広報「はだの」のコラム「仲間募集」に（米人家庭での英会話サークル）なるものを見つけて、電話した。英語は中学のそもそもから苦手。夫の仕事関連で外人客を家に迎えるような時々は、あわあわしていたのである。カエルを（ケロググがないてる）などと言って、家人の嘲笑をかう始末だった。

その米人家庭は家から歩いて五、六分の距離。バス通りを横切るとすぐに畑道にでる。教えられた通りに、畑道にポツンと自販機が途方に暮れているように、立っていた。その畑を大きく回り込んだ先の、借家を大きくしただけみたいなの、かなり年期的に入った家だった。ベルを押すと、色黒の小柄なものの静かというよりは、キツチリ手堅い感じの日本人の夫人が出てきて、隣の

プレハブに案内された。彼女は入口近くに座っている米人に「ニュー カマー」と言った。

その米人、バーガー先生は中年の男性で、小児麻痺、ポリオの重い後遺症を抱えていた。外出時には、ベルトでガツチリと腕に固定し、握りの大きなアルミの杖を掴み、両手で突かなければならない。アメリカへ一時帰国した折は、ガラスケースに入った日本人形を背負って成田へ行ったらしい。大したガツツだ。ポリオの高熱で舌の先端が割れている。(彼女はそれが好きなんだ)と、バーガー。

後に知ったことだが、夫人はECCの、英語教室を長いこと経営していた。そのECCの研修会でアメリカに渡航した際、バーガーに出会い親密になった。帰国した夫人はすったもんだの果てに家庭を壊した。前の夫の執拗な抵抗と、二人の子供達の激しい荒つぷりは、私が知らなかっただけで、ここ、井の城地区では有名だったらしい。

プレハブ教室には十五人位の三〇代、四〇代の女達がびっしりと机を取り囲んでいた。

テキストもプリントもなく、バーガーが何か言っていると、生徒は前に横に頭を揺らし、周りの人と囁き合い、「バーガー先生、何て言ったの」と、いちいち解釈し

あうのだが、大方は結論が出るような出ないような。英会話の進歩はさておき、この人数の女性達が狭い空間であーでもないこーでもないとやっている、性格が顕わになって来る。しつかりした人、どうでもいいノンシヤランな人、優しい人。すぐ興奮する人、あの頃は日本のバリバリの高度経済成長期で、夫の転勤に従ってアメリカに移住する予定のメンバーがいた。一人は落ち着いた静かな人。一人は前進あるのみ、あつからんと無謀な人。

「彼女は、何処に行ってもダイジョブ。OK」と、バーガーの太鼓判。

月四回の英語クラスも三ヶ月もすると、メンバーは、あれよあれよと半減してしまった。バーガーに知的、人間的魅力を覚えなかったのは、英語の問題だけではないと思う。米語が喋れるだけの人、彼には教えるスキルがなかった。何とか方策を考えよう、集まって話し合おうと、しつかり者の山口さんが、ある日クラスの後に言いだした。

「家がすぐ近くだから、うちで話し合ったら」と私。そのまま私の家に流れた。お昼時だったので、中華レストランから出前を取ることにし、それぞれメニュー

が決まった時、電話が鳴った。

私の実家の、妹（由紀子）夫婦の経営している商店で、事務をしている石川さんから、

「あつ 妙子さん。何度も電話してたんですよ。さつき、お母さんが救急車で市大に運ばれたんです。なんか、意識がもうなかったみたいですよ。由紀子さんは市大病院に行つたきりです、電話もありません」
一気に、溜め込んだものをガツと吐き出す瘖高い声。
私は、総身がカアツと毛羽立ち、ちやぶ台返しのように一気に皆に帰ってもらつた。

登校している子供達や夫に、どう連絡したのか、記憶にない。私は横浜へ向かう小田急線に乗っていた。沿線の梅が目にくまぶしかつた。（水戸に生まれ育つた母は、梅の季に死ぬのか。好きだった梅に送られるのか）

横浜市大病院のある阪東橋の地下鉄の駅を、地上に出ると、いきなり足元からザツつと風に煽られた。春一番の吹いた日でもあつた。

病院の広いコンコースの左手に義弟の旬二さんが立っていて、素早く私を見付け、

「お義姉さん、遅かつた。お母さん駄目だった」
旬二さんは頬を引きつらせていた。続けて、

「町野のお義姉さんから連絡ありました？何か聞いています？」性急に言う。姉のことは私の頭から飛んでいた。

旬二さんにとっては婿入り人生の総仕上げの時が来たのだろう。姉や私にもきちんとそれなりに母を送つて貰いたいのだろう。

旬二さんに、母はけつして良い義母ではなかつた。晩年の母は、姉は（老人性うつ病）と切り捨てていたが、だいたい暗い顔をして、

「孫達とは食物が合わないのよ。（当たり前です。自分の食べたいものを自分で作れば問題ないと思います）由紀子はベトベトしたものばかり作るから食べられない」と、カステラとかプリンとか半端なものばかり口に入れて、店の帳簿はガツチリ握っていた。口を開けば、旬二さん攻撃。旬二さんは町野の遠縁にあたるので、紹介者の姉には決してむけられない。その驚くべき舌鋒の鋭さとその内容の馬鹿馬鹿しさ。私は当初は反発していた。しかし、母の欲しいのは（そうだね、ホントだね）の一言しかない。香淳皇后に似ていると人に言われて嬉しがる、ふくよかな人格者。何処へ行つても中心人物として推され、祀り上げられ、父が脳梗塞をおこすまで、長年熱心に保護司と民生委員を続

けた人。店の従業員の重大な不正が発覚した時、一言も責めずに、解雇に止めた人。彼が後に就業証明書に記入を求めて来た際も快く引き受けた人。退職した人達が顔を、見せに来るのは珍しくなかった。その人がこれか。

私が二十歳の頃、母は家を増築し、二階にもキッチンのある、いわゆる二世帯住宅にした。そして、始末の悪いでたらめ女の私は問題外、常日頃母が、何でも言う事を聞くのよ、と、思ったり言ったりしている妹に家庭を持たせる腹積もりを立てたのも母だった。

そういえば、夫を早めに亡くした母の直ぐ下の妹、三鷹の叔母は、末の娘の結婚相手の条件として、同居・一流大学・転勤なしを上げ、津田塾出のいとこは東大出の雰囲気の種類なちんちくりん、予備校講師と結婚した。ところが彼もさる者、ギャンブル狂にして叔母の財産を食い散らかす始末。父親溺愛の、おっとりお嬢様だったところは（心労の余り？）小学生の娘を残して逝ってしまった。婿殿との抗争の挙句、すでに認知症を発症していた叔母は愛娘の死も理解できず、葬儀の間中、不安気ではあったものの、終始、異常にニコニコしていた。

母のそのまた下の妹、北池袋に住む叔母の、美女中

の美女と結婚できなげや生きるの死ぬの果てに、なんとか結婚にこぎ着けた会計事務所を経営する息子が、はやばやとホステスに入れあげ、離婚騒動に至った。

その時、同居の叔母は完全にホステス側についてた。トロフィー ワイフはワイフ側からすれば、トロフィー亭主である。つまり、美女は夫をキャッシュデュイスペンサーとサツと見限って割り切るがはやく、母と息子達連合から二人を弾き出した、いとこや叔母の、食事はおろか一切の面倒の放棄を宣言する。

百才で逝った叔母が認知症になっていた晩年、娘（いとこの妹）達が老老介護に北池袋に通っていた。

この世代の姑達は同居する子供達の連れ合いを、敵性害人とか思うのだろうか。

「お母さんは こっちです。解剖を許可されていたようで」

旬二さんはエレベーターに進み、下の階へのボタンを押した。

「今朝、お義母さん 目が覚めた時から『気分がちよつと良くないから、あの ご飯いらぬ。ちよつと寝てる』って横になって居ただけけど、ゆっこ（由紀子）が見にいった時は荒い息をしてるって、僕もいき

なり呼ばれて『お義母さんしつかりしなきや駄目だ』
って声かけて揺すったんだけれど」

あの堂々と広く、白く輝く病院のコンコースの地下。
母がいたのは剥き出しのコンクリートが上下左右に圧
迫して来る、広いがじめつと暗い部屋だった。ゆらり
ともしない蠟燭。その先に母はこんもりと横たわり、
離れたところの椅子に由紀子と小学生の孫達がひとか
たまり、肩も小さく、うつむいて固まっていた。

母の体は、まだふんわり温かかった。

少し泣いた。正月に家族で年賀に行き、次に母を訪ね
たのは一ヶ月前。玄関を出て、母が地下鉄の駅まで送
ると言うのを、ここでいいからと押しとどめた。門扉
に、芯が抜けたように寄りかかる母を見て、もつと頻
繫に來なくては、と胸が突かれた。

「ふかふかでしよう、医者達が必至に心臓マッサージ
したから。空気で膨らんで」

旬二さんが影のように後ろから言った。普段おしやべ
り好きな由紀子は、私が入室して來た時に確認するよ
うに頷いたとき、影のように固まったまま無言。母の
体から離れると、私もぐったり惚けて空っぽになって
椅子に埋まった。

しばらくすると、二人の病院管理者が突然現れ、

「移動します」

母を壁の隅に引いて行き、その壁のボタンを押した。
家族が度肝を抜かれている目前、その壁がグリーンと
巨大な口を開け、母はストレッチャーごと鉄の口に轟
音と共に飲み込まれた。(ゴミ収集車のかい奴だ)余
りの不意打ち、余りの酷さに棒になるしかなかった。

母の解剖まで時間を要する、ということ、火葬許
可証とか葬儀の段取り、親戚・知人へ連絡がわつと押
し寄せてくる妹一家に代わって、私が母の付き添いを
申し出た。

解剖は病院とは道路を隔てた向こう側の建物で行わ
れると言う。案内されたのは、私が子供時代から見慣
れている、鋭三角形の横浜市大医学部の決して大きく
はない建物だった。中学時代、この建物の前でグイグ
イグイッと軋みながら直角にカーブする市電に揉まれ
て、通学していた時期があった。痴漢の襲撃に会い続
け、結局、徒歩通学に変える事になったが。

建物の入口を入ると、裏口まで一直線の廊下。真つ
直ぐ進んで、出口に突き当たる手前のドア、三分の一
は何も無い空間、三分の二にパイプ椅子が十何脚か空
間に向けて置いてある、窓のない部屋にいざなわれ、

一人になった。係は直ぐの裏口から外に出ていったようだ。(母はどこに居るんだろう)

仕方なく、パイプ椅子に座り、いつも電車に乗る時はバックに入れてある本を読む。

一時間経つてもなんの動きもない。建物全体が無人のようで、山の一軒家のように静まり返っている。私の役目は、ただただ待っているだけ。

昼食も抜きで出て来たのを思い出し、何か買ってこようと部屋を出た。

玄関に向かう左側は、三、四の教室が並んでいる。右側に一つ、ドアが開いている部屋。広めの総タイル張り。真ん中にベッドのような台。解剖室だ。母はこれからここに来るのだ。事故った兄が横たえられ、警官に付き添われた両親が死んだ兄に面会したのもここだろう。Y高を卒業した兄が現役で入学したのは、横浜市大医学部だった。東大に落ち、浪人も考えたが、担任の説得

「教養課程二年を終えた後、東大の医学過程を受けて合格すれば、三年から編入されるし、落ちればそのまま市大医学部で三年生になればよい」で、兄は現役東大生も受験する僅か七人ぐらいの枠に入り、東大医学部に編入された。また十年後、死んで市大に

戻った。兄が通った市大はここではなく、金沢八景のキャンパスだったが。

飲み物を買って戻ると、ドアを入った真ん中にワゴンに乗った棺が置かれ、六、七人の四〇前後の男女で部屋は一変していた。叫んだり、囁いたり、散乱する彼等の声を背中に浴びていると、一人が立って来て

「お友達ですか」間髪を入れず鋭い声が後ろから「違うわよ」

一人、二人、気になってしょうがない風に棺に近づき、ぐずぐずうろろしてから戻ったりするが、決して棺の窓は開けない、棺に触らない。

彼等の気の立った散発的な言葉を組立てると、どうやら棺の中は女性らしい。長いこと行方知らずになっていたが、昨日何処か屋外で、死後何日か経過した姿で発見されたらしい。そして、兄弟姉妹が呼ばれたらしい。

彼等のごたごたを聞いていると、何だか、背中が居づらくなつて、また外に出、横浜橋商店街へ歩いた。

商店街のアーケードの塗替え工事を請け負ったのは、妹夫婦が継ぐ前の、父の代の塗料店のお得意様で親子の経営する塗装屋だった。お得意様はその後、保証書の裏判を押して、潰れた。

戻つて来ると部屋は無人になっていた。存在感抜群だった、お棺も消えている。

解剖室にも動きはない。

小一時間程本を読んでいると、男が二人、連れ立って来た。先に入った片方が、部屋の隅の小机を引つ張ってきて、その前後に椅子を据え、一方の男と差し向かいになり、ノートを広げた。片方が質問し、一方が答える。何やらせわしなく書き込んでいるノートは、調書だったかもしれない。

質問されている男の父親が、何処からか転落死した。過失ではなく、自殺のようだ。

「最後に父親を見たのは」
など、根掘り葉掘り。

また背中がもぞもぞしだし、暗くなつても来た。お弁当を買いに出た。

戻った時には、二人共消えていた。

一口、二口食べ始めたところに匂二さんが現れ、

「交代します。もう晩御飯も食べてきました」

私は歩いて十五分程の実家に行った。

食卓に全員あつまっていたが、食事は済んでいた。私はお弁当の続きを、口に運んだ。

由紀子は、魚屋のおかみさん系の明るさを取り戻しつつあった。三人の小学生達は無口だった。

「昨日は庭掃きなんかしてたのに。町野（姉）からまだ何にも言つてこないのよ」

四年前。

父が亡くなった知らせを受けて、私は直ぐ実家に向かった。実家に着いた時、町野の姉が母の横に居るのを見て、その素早さに驚いた。

死ぬ前の一年半、父は何度目かの脳梗塞に倒れ、布団生活に入っていた。半健康状態の母と妹が毎晩父に添い寝をして、トイレ介助をしていると聞き、（土曜日くらい由紀子を匂二さんに返さなくっちゃ）私は夫の支援のもと、土曜日の夕飯を手早く片付け、子供達を彼に託して、実家に向かう。子供の一人を負った時もあった。

妹は、介助なんか生まれる前から手が知ってるよ、のタイプだが、私ときたら頭でこねくり回すばかりで、ギクシヤク介助。父も忍の一字で土曜の夜を耐えたただろう。

その間、姉は一度も来なかつたらしい。私には父のことで、あれせいこれせい遠隔操作することはあったが。私には、姉の近くに偶然住む義母と義姉達が、何

やかや姉の家に押しかけて世話を掛けている、弱みがあった。(お姉ちゃんは何に介助にこないの?) と思ったことは一度もない。料理家の浜内千波に似たお澄まし型の雰囲気、お上品系の姉と大人のオムツの取り合わせはあり得なかった。

しかし、父の枕頭に待てる姉を見て、結婚後なぜかソロバン玉をはじいてから行動するようになったなあと、思わずにはいられなかった。

解剖室から戻ってきた母の髪を梳くと、太い糸の荒いステッチが、母の頭皮の解剖部を無残に巡っていた。

母の四十九日。中学生の長女は重要な試験を控えていたので、家に残って、四大家族で実家に向かった。車で出発して十分、善波トンネルを抜けた下り坂、ドライバの夫が(あつ)と叫んだ。(追突するの?) と前の車を見て、(まだ、十分距離があるな) しかし、その車はこつちに向かつて飛んでくる車だった。痛みで呻いた。痛みで振り向けなかった。子供達に声を掛けると、返事が戻ってきた。夫は、

「痛い? 僕も痛い。正浩(息子)、血だらけだ」

「救急車呼びましたから」知らない人が、車のガラス

を叩く。夫は息子を抱いて人だかりしている路肩へ出ていった。(よせばいいのに、正浩は怪我してるんだから、そっとしておいて) 夫は息子を抱えて、見物人や事故関係者と思しき人達と、のんきに談笑しているように、ここからは見える。夫の運転ミス? 潰れている車は三台だ。ドライバは三人揃っているが、誰も頭を下げてる人がいない。誰も非難している人もいない。後に判明したところによると、一九才の普通車の少年が登坂中、スピードオーバーでコントロール不能になり、一九才の運転する登坂中の軽トラにぶつかった。その二台が降坂中のこちらに正面衝突してきた。

救急車へ、次女は歩こうとして歩けなかった。三五年前のあの時でも、夫はシートベルト着用に厳しく、それ故に、結果的に私達の命は助かったのだが、次女はベルトの金具で骨盤を骨折した。息子は体が小さく、ベルトからはみだして、運転席の背もたれに頭と顔をぶつけた。夫はあばら骨を骨折。私は、

「完全なる、全身打撲です。ハッハッハ」

救急車で運ばれた堀江医院の院長は、大喜びだった。後に、請求書を見て知ったのだが、事故保険扱いの場合、保険料の二・五倍の計算になるのだ。

家族四人が事故入院すると、どういう事になるか。

四十九日の法事中の実家への電話で、まず法要から、私の兄弟・いとこ達が病院へ直行してきた。

事故現場の写真入りで新聞の一面に載ったので、夫の会社関係・子供三人のそれぞれのクラス委員・それぞれのPTA、ご近所・友人関係。そして、知らなかった親戚まで。整理券状態です。

事故から三ヶ月後、久し振りの英語クラスは、渋沢駅近くの古アパートに移っていた。なんでも、しよっちゆう家に入入りしていた夫人の親友とバーガーがややこしい関係になり、激怒した夫人が、バーガーをおつぼり出したらしい。小田急線の線路脇、水洗でもないトイレに、絵入りの高価なトイレトペーパーを備え付け、テレビもオーディオもない部屋で、巨大なジグソーパズルを一個一個嵌めながら、バーガーは一日を送っているらしかった。

炬燵を囲んでいる生徒は、五人になっていた。結構バーガーの米語にも慣れ、私達はシヨボい返事、おずおずと質問など出来る様にはなっていたが、米語を喋る楽しさには、まったく至らなかつた。そして、五人が三人になって、三ヶ月、全員止める事になる。

「今日が私達の最後の授業です」と、バーガーに宣言

した。もちろん米語で。

私は翌日、夫人から電話をもらい、

「貴方は止めないで欲しい。個人レッスンをここ（自宅）で受けて」と言い渡されてしまった。

完全にあちらの事情である。バーガーは大胆にも大手の語学教室に応募書類を送ったりして、はねられ続けていた。バーガーが無収入になることは、どうしても避けたい。お金の問題ではない。その強い夫人の意志に負けてしまった。おまけに、月二千元だった月謝が個人レッスンなので、六千円とは、やっつけられない。自宅の居間の横の板敷きのスペース、テーブルセットにおさまったの授業は、大方、彼の愚痴の聞き役（私はお前のセラピストか）。ポリオ前の天使のような彼のアルバム、旅行のスクラップブック、等々。ウンザリ。

三ヶ月後、事故の後遺症がぶり返し、私は長期入院になり、バーガーとは、それきりになった。彼と夫人は、その後アメリカに渡った、と聞いている。

夫人はバーガー命というより、アメリカ命なのだ、私は考えている。